

## 日本武道に見られる思想の研究（その2） －日本武道における「空」の一考察－

ビットマン ハイコ

### はじめに

今回は日本武道に見られる思想のなかから、「道」について論じた<sup>1</sup>。日本の武道は現在世界中に広がりつつあり、国際化している。人々は単に身体的・技術的な面だけではなく、修行において心あるいは精神面を求めているように思われる。言うまでもないが、武道は、単なる結果として示される成績だけを目的としているのではなく、人格を完成する「道」であることにつながる。即ち、勝敗のような計ることのできる結果は優先的なことではなく、修行のプロセス自体がより大切なことである。武道の本質はそのような「心技体」の密接不可分な統一である。その「心」の面に大きな影響を及ぼしたのは「空」の思想と言えよう。

そこで、今回は日本武道における「空」の思想について考察を試みようと思う。

そのために武道文化の中で「空」という概念がどのような意味を持っているのか、どのような影響を与えているのか、どのような歴史的過程を経て今日まで残されてきたのか、などの観点から追究してみたい。

### 「空」の概念試論

最初に「空」の文字のそのものについて考えてみよう。藤堂明保氏の『漢字大辞典』によると「空」の解字は次の意味を持っている：「工は、つきぬく意を含む。「穴（あな）＋音符工コウ・クウ」の会意兼形声文字で、つきぬけてあながあき、中に何も無いことを示す<sup>2</sup>。「空」の現在における常用漢字の音読みは「クウ」、訓読みは「そら」、「から」、「あ」く（空く）、「あ」ける（空ける）がある。常用音訓ではないが、「クウなり」という意味では「むな」しい（空しい）の読み方も定着している。

日本武道の一つである空手道を例にあげると、「空」という字はまずこの道において武器を使わないという観点を示している<sup>3</sup>。加えて、この字は武道全体に関しても、インドに起った仏教、そして中国で開宗され後に全東アジアに渡る禅仏教の重要なかつ中心的な概念を反映させている。

再び辞書を引こう。「空」の仏教的意味は「意識（色相）をこえてすべてをゼロとみなす悟りの境地。いっさいのものは、因縁によって生ずるもので、不変の実体はないという仏教の根本理念の一つ」<sup>4</sup>である。

さらに、「空」（梵語シューンヤター・*śūnyatā*）という中心的な概念は禅もその一派である大乘仏教の『般若経』<sup>5</sup>の中にはっきり示されている。般若経は大乘仏教の中でも禅宗の中でも基本的な意味を持っている<sup>6</sup>。デュモリン氏はこの経の教義を次のように記述している：

「空を通してみる、つまり現象界、経験的な自己、すべての属性や形の空、そして概念や言葉を超えることによって無へ押し迫る般若は現実の中心である。般若（梵語プラジュニャー・*prajñā*）や空は互いに関係しており、そして肯定的かつ否定的な形相で同じ現実をさとらせる。空のプラジュニャーの直観は見ることである。だが、この見ることは目で見るとは異なる。禅の達人は無心あるいは同じ意味合いで無念を語る。」<sup>7</sup>

「空」は上に述べた経の中では全く新しい概念ではない。おそらく、仏教に関する最も古い文献を持つ小乗仏教の中で「空」は「広範囲に渡る“苦しみ”という意味を持っていて、空を会得することは解放への門に至ることである」<sup>8</sup>。しかし小乗仏教の場合、「空」は人に限られている。このことに対して禅及び大乘仏教の場合、全てのものが空であり、全てのものが実体を持たないと見なされる<sup>9</sup>。

デュモリン氏によると般若経の中に取められた「空」を通して見る般若は「禅仏教に特に重要である悟り<sup>[10]</sup>の実体を推定する。悟りは空や真如<sup>[11]</sup>と同意語である。般若は有無であり、説明することも記述することも不可能である。道は悟りであり、悟りは道である。」<sup>12</sup>

禅の観念を武道に転用するために方向性を示したのは沢庵宗彭禅師（1573-1645）の剣に関する深い詳述であった<sup>13</sup>。沢庵の思想の本質は大乘仏教や般若経に根ざしており、何ものにも何処にも己の心がそれに執着しないし、捕らわれない、悟った心の空である無心の記述として展開されている。相手あるいは自己に捕らわれた心は「止まる心」であり、不自由な心になり、そして自由自在に対応できず相手に応じられなくなる。沢庵はこうした心の状態を「迷い」と言う。沢庵はこのことを剣の修業者に要求する一つの例として『不動智神妙録』の中で次のように述べる<sup>14</sup>：

「人も空、我も空、打つ手も打つ太刀も空と心得、空に心を取られまひぞ。」<sup>15</sup>

しかしながら、沢庵だけでなく、同時代の剣豪柳生宗矩（1571-1646）や宮本武蔵（1584-1645）の剣の道も禅の形而上学に基いたものである。柳生宗矩は『兵法家伝書』の「活人剣」の中で次のように言う。

「然ば、此空は天地にありては天地のあるじ、人の身にありては人の身のあるじ、舞をまへば舞のあるじ、能をすれば能のあるじ、兵法をつかへば兵法のあるじ、鉄炮をうてば鉄炮のあるじ、弓を射れば弓のあるじ、馬をのれば馬のあるじ也。」<sup>16</sup>

さらに宮本武蔵は『五輪書』の「空之巻」において次のように述べる。

「其心をしつて、直なる所を本とし、実の心を道として、兵法を広くおこなひ、たゞしく明らかに、大きな所をおもひとつて、空を道とし、道を空と見る所也。」<sup>17</sup>

空手道においても同様な例は見られる。例えば富名腰義珍（1868-1957、松濤館諸流派の共通の祖）の『空手道教範』の例が示すように「空」という概念は現代に至るまで重大な意味を有する。

「空手を学ぶ者は明鏡の物を映すが如く、空谷の声を伝ふるが如く、我意・邪念を去り、中心空虚にして只管受ける所を窮めなければならぬ。空手の「空」の字は一に之に揚げる。[...]

色即是空空即是色、空手の「空」の字は亦一に之に揚げる。」<sup>18</sup>

## まとめ

このように、沢庵禅師、劍豪柳生宗矩や宮本武蔵のさまざまな抜き書きは、彼らの剣に対する考え方に仏教、特に禅仏教の表象を取り込んだことを示している。空手道においても富名腰は、『般若経』の最も重要な経の一つといわれる『般若心経』<sup>19</sup>から、その経の核心部分とも言える「色即是空空即是色」をすら引用している。この「色即是空空即是色」は禅だけではなく、武道の教書にもしばしば記述されている。すなわち「空」という“状態”は禅だけではなく、武道においても得るべく境地を示しているのである。この状態に達すると、その技は、月が水にうつるのごとく現れると考えられるためである。一方、武道は禅の中にも含まれる“一領域”ではないが、“独自性”を保ちながら<sup>20</sup>、例えば「劍禅一致」や「拳禅一致」という表現が示すように、こうした仏教や禅の自然感の理、いわゆる「空」の思想に基づいているということも強調されているのである。このように仏教、特に禅の中心的思想とされる「空」の思想は武道文化にも取り入れられ、深い影響を与えている。

### 【注 釈】

- 1 ピットマン ハイコ（2002）「日本武道における「道」の一考察」、『金沢大学留学生センター紀要・第5号』、p. 33～38。
- 2 藤堂明保（2000）『学研 漢字大辞典』、学習研究社、p.922。
- 3 富名腰義珍（1935）『空手道教範』、大倉廣文堂、p.3を参照。

- 4 藤堂明保 (2000) 『学研 漢字大辞典』, 学習研究社, p.922。
- 5 梵語 *Prajñāpāramitā-sūtra*.
- 6 Dumoulin, Heinrich. *Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 1: Indien und China*. Bern: Francke, 1985; p. 45～を参照。
- 7 上記に同じ, p.138。
- 8 上記に同じ, p.46。
- 9 Diener, Michael S. (Hrsg.). *Das Lexikon des Zen. Grundbegriffe und Lehrsysteme, Meister und Schulen, Literatur und Kunst, meditative Praktiken, Geschichte, Entwicklung und Ausdrucksformen von ihren Anfängen bis heute*. Bern: Barth, 2. Aufl. 1992; p. 194を参照。
- 10 梵語 *bodhi* .
- 11 梵語 *tathatā* .
- 12 Dumoulin, Heinrich. *Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 1: Indien und China*. Bern: Francke, 1985; p. 46-47を参照。
- 13 中林信二 (1987) 「武術・武道」, 『日本体育協会, 最新スポーツ大事典』, 大修館書店, p.1095を参照。
- 14 市川白弦 (1978) 『日本の禅語録・沢庵・第十三巻』, 講談社, p. 199～を参照。
- 15 上記に同じ, p. 227。
- 16 柳生宗矩 (1972) 「兵法家伝書」, 『日本思想大系61, 近世芸道論』, 岩波書店, p.333。
- 17 宮本武蔵 (1972) 「五輪の書」, 『日本思想大系61, 近世芸道論』, 岩波書店, p. 394。
- 18 富名腰義珍 (1935) 『空手道教範』, 大倉廣文堂, p.3。
- 19 梵語 *Prajñāpāramitā-hṛdaya-sūtra*.
- 20 Dumoulin, Heinrich. *Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 2: Japan*. Bern: Franke, 1986; p. 255を参照。

#### 【参考文献】

- 市川白弦 (1978) 『日本の禅語録・沢庵・第十三巻』, 講談社  
今村嘉雄 (1966) 『日本武道全集』, 人物往来社  
岩波書店 (1972) 『日本思想大系61, 近世芸道論』, 岩波書店  
大塚博紀 (1970) 『空手道第一巻』, 大塚博紀最高師範後援会  
藤堂明保 (2000) 『学研 漢字大辞典』, 学習研究社  
中林信二 (1987) 『武道のすすめ』, 中林信二先生遺作集刊行会  
中林信二 (1987) 「武術・武道」, 日本体育協会 (編), 『最新スポーツ大事典』, 大修館書店  
ビットマン ハイコ (1997) 「空手道の歴史と『教え』について」, 『東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会, 東北アジア体育・スポーツ史学会第2回大会抄録集』, 東北アジア体育・スポーツ史学会組織委員会, pp. 439-449。  
二木謙一, 入江康平, 加藤寛 (1994) 『日本史小百科・武道』, 東京堂出版  
富名腰義珍 (1935) 『空手道教範』, 大倉廣文堂  
摩文仁賢和, 仲宗根源和 (1938) 『空手道入門 (別名空手術教範)』, 京文社書店  
宮城長順 (1934) 『唐手道概説』, (手稿)  
吉田豊 (1966) 『武道秘伝書』, 徳間書店  
Bittmann, Heiko. *Karatedō - Der Weg der Leeren Hand. Meister der vier grossen Schulrichtungen und ihre Lehre. Biographien - Lehrschriften - Rezeption*. Ludwigsburg und Kanazawa: Heiko Bittmann, 1999.  
Bittmann, Heiko. *Die Lehre des Karatedō*. Ludwigsburg und Kanazawa: Heiko Bittmann, 2000.  
Diener, Michael S. (Hrsg.). *Das Lexikon des Zen. Grundbegriffe und Lehrsysteme, Meister und Schulen, Literatur*

*und Kunst, meditative Praktiken, Geschichte, Entwicklung und Ausdrucksformen von ihren Anfängen bis heute.* Bern: Barth, 2. Aufl. 1992.

Dumoulin, Heinrich. *Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 1: Indien und China.* Bern: Francke, 1985.

Dumoulin, Heinrich. *Geschichte des Zen-Buddhismus. Band 2: Japan.* Bern: Francke, 1986.

Hammitzsch, Horst. "Zum Begriff 'Weg' im Rahmen der japanischen Küste". *NOAG* 82 (1957), pp. 6-14.

Suzuki, Daisetz T. *Die große Befreiung. Einführung in den Zen-Buddhismus.* Zürich: Rascher, 5. Aufl. 1969.

## The Term "Emptiness" in the Japanese Ways of the Martial Arts

Heiko Bittmann

The character for 'empty', or 'emptiness' - which in Japanese is read *kara* or *kū* - can be found in the name Karatedō. It refers on one level to the aspect of weaponlessness. On a deeper level, however, it reflects a central concept of Buddhism, which expanded from India, and of Zen Buddhism, which originated in China and spread across East Asia. This concept is equally important for all other Japanese Ways of the Martial Arts (*budō*) as well.

This idea of 'emptiness' is found in Mahāhāna-Buddhism, to which Zen also belongs, manifested in the 'Sūtras of Consummate Wisdom' (Sanskrit: *Prajñāpāramitā-sūtra*; in Jpn. mostly called *Hannyakyo*), which possess fundamental significance in Mahāhāna as well as in Zen.

Indeed, the 'emptiness' in the mentioned sūtras is not a completely new term. In Hīnayāna-Buddhism, which contains most likely the oldest Buddhist writings, 'emptiness' stands for "'suffering' in the most comprehensive sense, and the attainment of 'emptiness' is one of the 'gates to liberation'".<sup>1</sup> But the emptiness herein is only connected to the person, whereas in Mahāhāna and Zen all things are seen as 'empty' of any inherent nature, in other words, as insubstantial.

A guiding contribution in the transfer of Zen ideas to the martial arts and their ways, which have surely influenced many masters through today, were the profound statements of Zen monk TAKUAN Sōhō (1573-1645) regarding swordsmanship. The essence of his ideas, which show their anchoring in Mahāhāna and the Sūtras of Consummate Wisdom, leads to explanations about 'no-heart' (*mushin*), which is the enlightened heart that, without stopping

or sticking somewhere or within something, is 'empty'. For a heart that lets itself be captured by the opponent or the Self, a heart that stops (*kokoro ga tomaru*), is impeded, and cannot freely act or respond. TAKUAN designates such a heart that stops, as 'delusion' or 'perplexity' (*mayoi*).

But not only TAKUAN took the metaphysics of Zen as a basis for swordsmanship. Its influence is also perceptible in the writings of his noted contemporaries, the sword masters YAGYŪ Munenori (1571-1646) and MIYAMATO Musashi (1584-1645) for example. Equally for all Japanese Ways of the Martial Arts the term 'emptiness' is of significance even to this day.

---

1 Dumoulin 1985, p.46.